相川
あいかわらばん
瓦版
第20号
2016年3月25日発行
発行：佐渡市世界遺産推進課
電話 0259-63-5136
FAX 0259-63-6130
編集：佐渡市世界遺産推進課
新潟県教育庁文化行政課
世界遺産登録推進室

上相川絵図［宝暦2（1752）年作成、文化9（1812）年複製］（相川郷土博物館蔵）

調査報告 上相川地区

～眠りからさめた鉱山町の暮らし～

江戸時代の茶碗（伊万里焼）

古道に面した屋敷境の石垣

苔むした石組みの井戸

京町通りから大工町、諏訪町の万照寺を越えて、金山第3駐車場から茶屋坂を上ると、そこが国指定史跡上相川地区です。

上相川地区は、道遊の割戸に代表される相川金銀山の発展とともに成立した初期の鉱山集落跡で、かつては「上相川千軒」と呼ばれるほどの賑わいをみせました。現在は、その役目を終えて無住となり、遺跡として山間部にひっそりとたたずんでいます。

佐渡市では、かつての面影を探るべく、平成27年8月から遺跡の一部で下草伐採と枯木竹を整理し、当時の地形や生活の痕跡を探るための調査をおこないました。その結果、かつての生活の様子を示す石垣や井戸の遺構、食器類などのほか、鉱石を砕くための鉱山臼や製錬の際に発生するカラミ（製錬カス）、鞴（送風管）の羽口も見つかり、この地が鉱山集落としての特徴を備えていることが証明されました。

調査は今後も続きます。皆さんもきれいになった上相川でいにしえの生活に想いを馳せてみてはいかがでしょうか。

相川の今昔

春日崎のその昔

鹿伏の岬端、相川市街地や相川湾を一望できる春日崎は、宝永年中（1704～1711）に地役人の辻守遊（つじもりゆき）が定めた「相川八景」のひとつにもなっている景勝地です。

また、この春日崎は、相川に鉱山町を開いた佐渡代官の大久保長安とも関わりがあります。現在、下戸村に鎮座する春日神社は、慶長10（1605）年に春日信仰をもつ長安の意向でこの岬に創建され、元和5（1619）年に下戸村へ遷されました。このことが春日崎という地名の由来となったそうです。

明治時代の春日崎のようすが、明治36（1903）年発行の「佐渡新聞」に記されています。それは、同年8月に相川を訪れた高田新聞社の大竹忠太郎が「佐渡新聞」へ寄せた記事であり、春日崎で催された納涼会に招かれた時のことを「春日崎は六年前と違って平坦で、納涼会には適当の場所になっている、（中略）本年の五、六月頃地均しをして、運動場にしたのだそうだ」と綴っています。

明治36年5月の同新聞記事「春日崎運動場の落成式」には「従前運動場に使用せし面積に比するに約3倍の広さとなり」とあり、もともと運動場として使用していた春日崎の改良工事をおこない、面積をさらに広げたことがわかります。

明治38年に春日崎で開かれた運動会のようす（相川郷土博物館蔵）

今月のにゃんじー

「お花見」

三寒四温、少しずつ寒さがやわらぎ、春の訪れを感じます。にゃんじーはひと足早いお花見です。

第21号の予告

◆見学報告
ほか

次回5月25日
刊行予定

あいかわらばんのデザイン:佐渡市世界遺産推進課　キャラクターデザイン:aki*kana haraguro design studio　印刷:㈱第一印刷所

見学報告 その2 歴史を活かした各地のまちづくり

群馬桐生（きりゅう）～大久保長安が町立てした織物のまち～

みどころ

相川と同じ方針をもつ町並み保存

江戸時代から現在まで、色々な時代の建物を尊重しながら、町並みを残そうとしている。

相川と同じ課題をもつ

・増える空家
・地域の高齢化　など

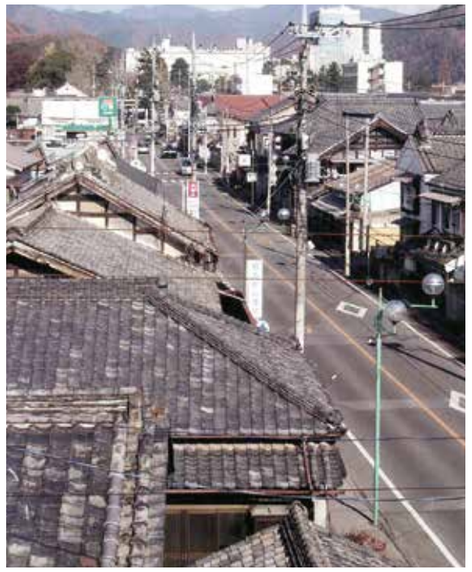
解決にむけてどのように取り組んでいるのか？

前号に続き、昨年11月におこなった町並み見学の模様を報告します。今号は、群馬県桐生市の町並み保存地区「桐生新町」を中心に、その取組みを紹介します。

桐生新町は、天正19年（1591）、徳川家康の命を受けた大久保長安が、手代の大野八右衛門に町立てをさせて、できた町です。近世から繭や生糸、織物の取引の場として発展し、近代になるといち早く先端技術を取り入れ、日本有数の織物のまちとなり、「西の西陣、東の桐生」とも言われました。

現在は、特徴的なノコギリ屋根の織物工場をはじめ、買継商人の屋敷や、織物職人が暮らした長屋など、絹織物業を支えた各時代のさまざまな建物がその周辺環境とともに残り、約400年の歴史をもつ桐生のまちの歩みを物語っています。

また、こうした地区の一部が、重要伝統的建造物群保存地区（国の文化財）に選定されています。建物の所有者、建築士、大工、専門家、行政職員など、さまざまな人が桐生の歴史を守り伝えていくために活動しています。



桐生新町重要伝統的建造物群保存地区
16世紀末、天満宮を基点に、北から南へ一直線の通りが開かれた。
出典『伝統的建造物群保存対策調査報告書-織物ともに生きる人々のまち・桐生新町-』（平成21年,桐生市）

ノコギリの歯のような屋根をもつ織物工場
桐生市内には約220棟のノコギリ屋根工場が現存する。

織物職人が暮らした長屋群
機屋の社宅として設けられ、最盛期の桐生の姿を今に伝える。

上越新幹線の「高崎駅」からJR両毛線に乗って約50分で最寄駅「桐生駅」に到着にゃ

歴史ある建物を活かす

年々、空家・空き店舗が増えている桐生。相川と同じ課題を抱えながら取り組んでいる。

◆有鄰館（旧矢野蔵群）

右：煉瓦蔵
左：味噌蔵・醤油蔵

酒・味噌・醤油を醸造し、保管するために使用されていた、江戸時代から昭和時代にかけての11棟の蔵群。桐生市に寄贈され、現在は、舞台や展示、コンサートなど多目的に使用され、町並み保存の拠点ともなっている。建物は、安全性を保つために改修されているが、使い込まれた蔵のたたずまいが活かされている。

建物の歴史や価値を理解しているからこそできる使い方にゃ！

◆美容室アッシュ（旧堀祐織物工場）

昭和10年頃に建築された、大谷石造のノコギリ屋根工場。平成11年に改修され、現在は若者に人気の美容室に。

◆ベーカリー&カフェ レンガ（旧金谷レース工業株式会社ノコギリ屋根工場）

大正8年の建築で、煉瓦造のノコギリ屋根工場としては市内で唯一。現在は、カフェベーカリーとして使用されている。

歴史ある建物を残して活用することで、
まちに貢献しようと誇りをもって取り組んでいる人がたくさんいたにゃ。

◆伝建まちなか交流館（機屋の元事務所）

大正6年創業の機屋の事務所として使われていた建物。現在は桐生市の施設であり、建物の修理や町並み保存、空家などに関する相談所。月曜の休館以外は、休日も職員が交代で待機している。

◆土蔵の外壁修理

長い歴史を伝えるために

黒っぽい外壁は、もともとあった材を再利用している。材を残すことで建物が昔からそこにあったことの証となる。関係者の理解や努力によって、日々検討が進められている。

大工や建築士の皆さんの勉強会も盛んらしいにゃ。